

## ある特派員

徳永 直

一

K雑誌の特派員一田は、新京のその宿に十日ばかり泊っていた。

毎日少しずつ原稿をかいて、飛行便で東京の雑誌社に送っていたが、釜山經由の汽車便でなら三日で東京に帰れるのだし、むりにそこで書く必要はなかった。またそこから更に北支の方へでも旅行をのぼしてみるプランもなかったのであるが、なんとなくエアポケットにでも陥ちこんだ気分でも過ごしていたのである。

一田は風邪をひいていた。何という風邪であるか、診てもらった三人の医者が、三人ともちがったことをいうのでわからなかったが、とにかく咽喉が痛くて七度ないし八度の熱があった。寝ているほど大儀でもないが、薬を喫んでもなかなかサツパリしない、ヘンな風邪である。北満を一巡りしてくるうちにひいた風邪で、それは明らか

な自覚がある。九月だったから、一田は東京を夏服で出てきたが、佳木斯や湯原ではもう毛皮外套を着ている満人がいた。慌て者の彼が汽車を間違えてホリカン炭坑に迷いこみ、無蓋の石炭列車で逆送されたときなど、匪賊がでるかも知れないという曠原のふきツさらしで、ガタガタふるえていたから、そのとき既に発熱していたに違いない。

移民地のY村で診てくれた最初の医者は、パラチブスだと診断した。この病院で収容してもいいが目下満員だからなるべく設備の充分な都会までいそぎなさいと云った。伝染患者を追っ放すのもおかしいが、夜を日についてでハルピンまでくると、第二の医者は風土的なマラリヤ性何とか風邪だと云った。やっと新京に辿りついて第三の医者に診てもらおうと、いやチブスでもマラリヤ何とかでもなくて、ただの風邪だと云った。

「疲れですよ。咽喉が少し悪いが、なにやすめばすぐ癒る」

と云つて、臆病者の一田を安心させた。しかしなかなかすぐは癒らなかつた。

Dというその宿は、新京では二流だそうだが、ガツシリした洋館で、関西出だという若夫婦のジャングイ（主人）も上品な人達であつた。ただ何となくおちつかない。それはいつも満員であるばかりでなしに、たとえば廊下で擦れちがつたりする浴衣がけのお上りさんらしい男が、挨拶してみると言葉の通じない満州人であつたり、夜おそくドヤドヤ入ってきた毛皮帽子にカーキー服の一団が飛行士たちで、何千キロも遠くの国の匂いをまだ身につけていて、そこらじゅうに振りまくといった風の、それをまた内地からきて間がない女中たちは、言葉や応待のつかいわけがでさずに怒鳴られたり、ジャングイまでが見当つかず梯子段で立往生しているような、そんな空氣のせいだったか知れない。

一田の室は三階の端っこにあつた。畳をしいて、床の間があつて、違い棚には安物の博多人形なぞおいてあるが、まわりはまだ粗々しい鉄筋壁で、頑丈なスチーム管がとぐるをまいてるといった室であつた。

朝めがさめると、一田はいつも——いま満州へきてい

るんだ——という意識をとり戻すと妙な気がした。窓の外、即ち宿の裏手は、同じたかさの煉瓦の建物が四角にとりまいていて、たくさんの窓がこちらとむかいあつてゐる。その正方形の空間になつている中庭のような場所には、工場ともつかない家のトタン屋根が十ばかり眼の下にあつたが、とうとう到頭何であるか一田にわからなかつた。

まだ九月の末であつたが、窓の多くは閉まつていて、錆びた欄干のつきだしには、どれも行儀よく洗面器やらバケツやらがならべてある。どうかして窓があいているとき、内地から嫁にきて間がないらしい若い女が、やや着くずしたはれぎ晴着のまま、所在なげにあたりを見廻しているボンヤリした顔とぶつかることがあつた。

「お客さんは、どこへでもないんですね」

掃除に入ってくる色白な眼の小さい女中は、そんなことを云つた。

「どうして？」

箒においたてられて、室の隅をあつちこつちめぐりながら一田が訊くと、

「だって、みなさんが面白いところへいらッしやるんじやありませんか」

とこたえながら、女中はキャツキャツとわらうのであった。銀杏返しに結って、幅のひろい帯など結んでおるが、よくみるとまだ小学校をでて間がない年頃であった。なるほど、一田はどこへも出かけなかったようである。東京をたつとき幾つかもらった紹介状もあったが、なぜか一々たずねてゆく興味もおこらなかつた。

しかし考えてみると、彼はわずか一ト月そこらのうちに、随分沢山の人に逢っている。雑誌社が作ってくれた特派員という肩書の名刺を百枚以上もつかつたし、貰つた名刺もまたそれを超えている。しかしどこでどういう人にどんな機縁で逢つたかも、わずかしか思ひだせない。みんな同じようで、同じ角度で、これ以上何百人の人に逢つたところで無駄だという気がしている。沢山の人に逢えば逢うほど、ヘンに淋さびみしく一人ぼっちな気がしてくるのである。

「風邪は癒つたんですか」

飯をよそつてくれながら、小娘の女中が訊いてくれる。

「いや、癒らん」

この頭の毛の赤い女中なぞが、かえってこんどの旅でちかづきになった一人であろう。この娘の兄さんはいま

中支に出征して、山口の郷里にはお母さんと三人の弟妹が、百姓をしているということであつた。

いつか手帖をもつてきて、記念に何か書いてくれというので、そのクリーム五十銭とか、石鹼二十五銭とか、または小為替十五円也とか鉛筆で書いてある手帖の端へ——いい婿さんと結婚して、はたらき者の立派な細君になられんことを祈る——と書いて、一田は自署してやつたが、彼女は顔をあか赧がとながらも「有難う」といつてお辞儀した。

くる途中、船の中や、或は奉天駅で汽車を乗換のりえるときなぞ、胸へんにブラチナの鎖をからませたような年輩の男に引率されたこんな娘たちが、着物、洋傘、帯、草履、みんな新あたらし物づくめで、それが安物だけによいけばけしい身装の娘たちが、どつか遠くをボンヤリながめているような眼つきに幾度もぶつつかつたが、この娘なぞも金を貯めて内地へ帰るのか、或は「大陸の花嫁」となつて移民地へ世帯をもつようになるか、それは彼女自身にもわからないであろう。しかし万が一にも、北満のある地方できたいような、最初は女中で、おつきがピーや、はては満州の旅がらす——なぞということがあつ

てはならないという気持で、一田はそれを書いた。

「ねエ」

飯をくいながら、一田は女中に訊いてみた。

「――満州人がたくさんいるところを知らないかい？」

「満州人？」

女中は妙な顔をした。

「満州人はそこらにいっぱいいるじゃありませんか」

なるほど、これは一田の訊き方がわるかった。満州人はどこにもいた。半月あまりの北滿めぐりの途中でも、

いたるところで満州人はみたのである。しかし一田はどうも、満州へきて満州人をみた気がしないのである。

「そうだなア」

一田は、うまく自分の気持を表現することができずに、それきりでおかしな問答をやめてしまったが、何となく淋みしかつた。満州人はたしかに何百何千とみた。しかしそれは彼らのある一面だけで、どうもまともにみた気がしない。或はこんな気分になるのも一種の旅愁からくるのかも思ったが、どつちにしる、それは知人と逢ったり、賑やかな場所へゆけば癒えるという性質とも違っていた。このまま東京へ戻って、いつか気持は転換できる

としても、この感じはうずめきれないで、いつまでも記憶にのこる、そんな種類のものではあつた。

夕方になると、一田は宿のどてらをきて外へ出た。道路一つ距てた向い側に新宿の三越によく似た建物の、Hというデパートがあつて、そこで足袋を買つたりした。

物貨は煙草などを除けばすべて内地品で、三割ないし五割くらいかかった。琥珀とか、毛皮類とか、高粱酒とかいった。土地産のものもすっかり名所土産になつていて、デパートそっくりが内地から移住した感じであつた。

新京には電車がないので、殊に街はひろく見えた。デパートをでて十字路にたつと、うす青んだ夕空はよく乾いていた。曠原の真ん中をローラーで押しつぶしたような舗装道路が、いったいどのへんまでつづいているのかわからぬが、道路の片側には雑草の茂つたままの原っぱものぞいていて、露店の煙草屋がカンテラをともしている。それかと思うと、原っぱのむこうにはまた忽然と、銀いぶし色の鉄柱にささえられた無数の鈴蘭燈をかがやかしながら、繁華な街がひらけているのであつた。

D街とか、Y町とか、日本名と西洋名とがごっちゃになつている町名にも、新開地らしいケバケバしさがある。

銀座あたりを模倣した色ガラスに色電燈のカフェーが並んでいるかと思うと、縄暖簾に市松格子のおでん屋が、凝った行灯までかかっていたりする。街は一本で、フイにくらい闇にのぞかれています。横路地には、七輪ひとつを商売道具にバタバタ団扇をうごかしている老人の満州人がいて、それと肩を寄せあったカフェーの女給が、トウモロコシを嚙かっているが、彼等の背後は涯はて知れぬ曠原が闇の底に拡がってみえた。

一田は毎晩そこらをあつめた。カフェーにもバアにも入らなかつた。酒もコーヒも欲しくない。人に逢いたいとも思わなかつた。あるき疲れるとボンヤリ並木の蔭かげにたち呆ぼけていた。

洋車ヤンチヨがとおる。馬車マアチヨが駆けてゆく。あかるくひろいアスハルトのうえを背のひくい満馬がトコトコと駆けてゆく。古ぼけて汚れた、泥除けなどのとれかかつた車体がカタカタととびあがつた。おそろしくボロをきた馭者がむやみと鞭をふりまわしているが、幌もなんにもない一段たかくなつた腰掛で、協和会服を着た男と内地からきた若い妻君とが、雛段の人形のように表情を固くしていた。ひろくて乾いた道路の真まん中で、それはまるで舞台のあ

る情景をみているような、どつか即すかない感じがあつた。Y町から足を返して、D街へもどつてくる。十字路があつて、角店の一つに「××軍御用達××屋食料品工舗」などというのがあり、向い側のくらい原ッぱに、いつもカンテラを灯している露店があつた。一田はそこでスペアとか、5バットとか、偽物らしいウエストミンスターだとか、その晩の気まぐれで、二つ三つの煙草を買つて帰るのだったが、ある晩、そこで満州人子供の喧嘩けんわをみた。

チャホー、チャホー。何という言葉ことばだか、フイにくらがりから、女の子らしい甲かんだかい叫びをきいた。そこは「食料品工舗」の工場らしい建物の蔭で、通りの灯あかりはとどかない場所だが、一田が傍へいったとき、十人ばかりの子供たちの群れのなかで、仰うのけにひっくりかえつた女の子が、顔をおさえて泣き叫んでいた。

青い裾のつぼまつた満服を着ていて、弁当箱らしいものが投げだされてある。ひっくりかえつた女の子のむこう側にも、同じ年頃の子供たちが三四人突つたつていて、口々に何か叫んでおり、また被害者のこつち側では一群れになつた男の子たちが、それにこたえて何か罵りかえ

していた。彼等のうしろにはくらい細い路地があり、そこからまだ沢山の職工らしい少年たちが次々とできて、その儘まま帰かえつてゆくのもあれば、立ち止とまつて群ぐんのなかに入いつてくるものもある。

一田には薩張り喧嘩の原因がわからなかった。言葉がわからぬし、前髪を短みじかく切きつた女の子たちのキンキンひびく声は、意味がわからぬだけ、却かえつて殺気をおびて感じられた。すると、こんどは突然、一田のすぐ傍で男の子同士が取とつみあいを始めた。痩せた坊主頭の二人の男の子は、足をあげて蹴けり合あつたかと思おもうと、次の瞬間には、腕でつっぱりあいなたがいながら、お互たがいに呼吸をはかっていた。泣き叫んでいる女の子と、どんな連関があるかわからぬが、まわりの子供たちははてんでに喚わきたて、また取とつみあっている二つの坊主頭は、おそろしく精悍せいこんにみえた。

「オイ、やめろ、やめろ」

無気味なほど真剣だったので、一田は自分の言葉が相手に通とじるかどうかも考えかんえずに、坊主頭のブクブクした黒い綿服めんぷくの肩に手をかけた。

「喧嘩、やめろ」

しかし自分で気がついて、手真似をしようとしたとき、一田はおどろいた。またたくうちにまわりがザワめいたと思うと、二つの坊主頭が急に見えなくなり、ホンとに蜘蛛の子をちらすごとく、たくさんの子供たちが、くらがりのなかに逃げこんでしまった。振りかえつてみると、いままで地べたで泣き叫んでいた女の子でさえが、他の女の子たちの肩にささえられて、露店の煙草屋がいろ原ツばを駆かけているのであった。まったく、あつという間もないすばやさであった。

一田はボンヤリして、しばらくそこにたっていた。いったい自分は何をしたというんだろう？ 足もとにくろい小さいものが落ちていたが、拾ひろつてみると、まだぬくみのある小さいゴム靴の片ツぽであった。

## 二

一田は毎日、宿の餉台ちやうだいに坐まつて原稿を書いた。それは「開拓地」視察記であった。しかし書いているうちに、ときどき、自分は満州にきて、満州人や蒙古人などのことは、何故ひとつも書かないだろうか、と思うことがあ

つた。折角千里の旅をして、満州国に来ていながら、日本人のことがかり書いているのだろうか、と思うのであった。

それは知らないからであった。日本人以外の人種を見ることはたくさん見たが、一人にも逢わないからであった。それは言葉を知らないからというよりは、機会がないからであった。

尤も、一田は自分で自分を、すばやく機会をつかむような、機敏な人間だとは思っていない。K雑誌社はどういうつもりで、一田のような作家に白羽の矢をたてたか、一田も見当つかないが、これはどうも「特派員」などとしては見込み違いであったと思う。一田は愚図で、ボンヤリであった。勇敢のかわりに臆病で、有通自在ゆうずうのかわりにヘンな頑固さがあった。これはどっからみても、「特派員」などという資格はない。

或は、彼は特派員の「代用品」かも知れなかった。その節は機敏な、流行的な作家はいろんな方面に特派されていたから、人不足で、一田のような作家まで、ひっぱりだされたのかも知れない。その証拠には、承諾してから出発まで五日間しかない早急さであった。チブスや、

コレラなどの予防注射もロクにする暇がなかった。ボンヤリな彼は、まるで足許あしもとから火がついたようで、わずか五日間のうちに時代を認識させられた気だったのである。

殊に、東京駅を発つときは、気の小さい彼は、だいぶあがつてさえた。駅の地下室で、彼を歓送するという雑誌社の人々は、ビールをのんだ勢いで、一人一人、一田を激励するテーブルスピーチをやった。鈍間のろまな一田は、最初で激励されるのか、一人の人間が旅行するということだけで、それもホンの隣り国へいつてくるだけで、どうして激励されねばならぬのか、わからなかったが、しまいは、わからないままで、

「大いにガン張ってきます」  
と、激励されているのであった。

社旗をもった人々にとりまかれて、ホームへあがつてくると、また大変であった。そこには友人や、一田の家族や、その他に協和会服を着た、開拓地関係の会社や団体の人などがいて、てんでに日の丸の小旗を持つて人々さえあった。尤も混雑は、一田の出発のせいばかりではない。もうホームに入っている列車の窓からは、赤襷をかけた応召兵士たちの顔があちこちにあつて、その

窓の下で一団ずつになった歓送者たちが、旗を打ちふりながら歌っていた。そんな空気にこっちも煽られたのであろう。

ツカツカと寄ってきた協和会服の人達が、一田をとりまいて、新京の本社と連絡がとれたから、この上はもう、新京駅につきさえすれば、万事それからのプランは先方だててくれる、というのであった。

「そら、父ちゃんと握手なさい」

Hという友人が、一田の妻君が伴<sup>つ</sup>れてきている子供たちのうちから、小さい女の子を抱えあげてつきだすと、女の子ははにかみと一種の恐怖とで、到頭泣きだしてしまふ、そんな情景までが、何か物々しく、一田自身いまでも出征でもするような錯覚<sup>おぼ</sup>を起させるのであった。

「きみ、ね」

そのとき、ホームの柱の蔭にいた、眼鏡をかけた脊のヒョロたかい、友人のNが寄ってきて、

「——気楽にみてこいよ」

と、云ったので、やっと自分を取戻したほどであった。

「ああ、気楽にき。のんきに旅行してくればいいよ」

それほど、よそめにも一田はあがつていたのであろう。

この忠告は、一田にとつて作家としての自分をとり戻したほどで、有難かつたのである。

しかし、ボンヤリのくせに慌て者の一田は、その有難い忠告も、旅行の途中で、しばしば忘れがちであった。ありのままの眼に映る姿を、すなおに、ひろやかに受け容れる気持でなしに、嵌<sup>は</sup>められた一つの主観的な気分<sup>は</sup>に追いこまれがちであった。

三日めに新京駅につくと、いきなりおどかされてしまった。トランクを両手にさげて、フラフラしながら改札口をでると、駅の出口にできている人垣のなかから、短い口髭をもった黒背広の、底光りする眼玉が、一田の視線にぶつつかつてきた。臆病な一田はその視線をはずすことが出来ない。眼玉は益々光ってきて、一田は身体がすくんだと思うとたん、黒背広の足がツカツカと出てきた。——そして眼玉が一尺くらいに近よったとき、フィと横をむいてしまったのである。一田はビッシヨリ冷汗をかいていた。

自身怪しい人間ではないのだから、笑ってでもいければいいのだが、一田はすぐ慌ててしまうのである。

黄色い豆タクに乗って、開拓地関係の××新京本社の



ビルディングに着いたが、どこも協和会服の黄一色で、一田は一度や二度逢つても、誰が誰だかわからぬ気がした。受付から何々課へ、何々課からまた何々課へ、それから何々課の係長から次長へ、次長から課長へという順で、それもみんな同じ服だから誰がえらい人なのだか、兎に角名刺だけが増えるばかりで、それもどの室でも一度に三人くらいに取まかれるので、一田は益々間違つていたのであった。

「どうぞ、こつちへ」

恐らくこれが最後だろうと思う課長室へ入つてゆくと、  
○という頭の真ん中が禿げた年輩の課長は、もうちやんと、一田のゆくべき視察地と、その日程をかけた書類を示すのであった。

「いま、案内係の社員をよびます」

○課長が、卓上のベルを押すと、すぐ同じ服の青年社員が入ってきたが、課長から二三耳打ちされると、くると軍隊式に一田の方へむきなおつて云つた。

「それでは、不肖、私が案内致します。充分努力するつもりですから、どうぞよろしく——」

不馴れな上に気の小さい「特派員」は、恐縮していい

のか、自分の旅行の重大さにおどろいていいのか、わからないでいると、こんどは課長が、椅子を離れて一田を促すのであった。それはも一つ別系統の××省の役人に諒解を得るためである。

同じビルディングのその広い室には、大きなデスクの前に、若い協和会服がただ一人でいた。そして○課長と一田とが、揃つて名刺を差しだすまで、その若い事務官はこつちを振りむかなかつた。

「どうぞ、よろしくお願いします」

○課長が一田に代つて説明してから、一田が頭を低げると、まだ大学を出て間がないだろうと思う事務官は、名刺をとりあげ、

「K社だね、はあ」

と云つて、ヒョイとうなずいてみせた。もちろん流行りもしない一田の名前など、知っている由もないのであった。

それから、再び○課長室へ戻つて、一田はホツとした気持ちでいると、

「それで、××××××××の方への挨拶は済んでいるんですネ？」

と、課長が訊いた。

「いえ」

鈍間な「特派員」は、あわてて云った。

「じゃ、明日にでも廻ります」

しかし相手は、まだ一田の顔から視線を離さず、少し困ったような、憐れむような表情でながめているのであった。

一田は自分をよくよく馬鹿だと思った。日本から一寸ちよつとも外へ出たことない、この「特派員」は、村役場にでも出頭するように、ピヨコンとお辞儀しさえすれば、誰でもが、自分を信用してくれると思っていたのである。

翌る日、一田は保護監察官N氏の紹介状をもって、検察庁にいった。しかし訪ねていったH氏は出張中で、事務官のTという人が逢ってくれた。ここもみんな黄色い協和会服であったが、H氏の秘書らしいT氏は思いがけないほど丁寧ていねいに、一田の目的に力添えてくれた。H氏の出張旅程の紙片きれを卓の上に披ひけて、忙いそがしく飛行機でとび廻まわっているH氏の日程と場所を時間で繰くりながら、電話で連絡のとれしだい、一田の依頼する×××への紹介状を、晩までには宿の方へとどけてくれよう、という

ことであつた。

一田はホツとした。これで、この知らぬ他国でいくらか、身のあかしがたつ気がした。

しかし、も一つ×××があつた。

一田はK雑誌の社長の紹介状をもって、新京駅前の、D新聞社にいった。

まだ鉄筋コンクリの壁など、粗塗りのままかと思われる、ひろい社長室へとおされると、背の小さいY氏が、胸をつきだすようにして入ってきて、室の真中の卓の前にドカンと坐つた。

「もつとこつちへ、もつと」

Y氏は手招くのであるが、室の隅にあるソファは、社長椅子のところからは、教間けんも離れていて、何とも具合わるかつた。ひっぱってゆくには重いし、つまり一田は卓のまえにいつてたつのであつた。

「Kさんは元氣ですか、相変かわらず忙しいんでしょネ」

紹介状を読み終わってからK雑誌の社長のことをY氏は云つた。しかし臨時の特派員は、K氏のこともよく知らないのでボンヤリたつていた。

「それじゃ、そこで昼食でも喰つて、一緒にいつてあ

げましょう」

Y氏は、卓の上のベルをおしてから、

「ひとつ、満州を題材にした大長篇でも書くんですナ」

と云つて、とたんに肩をゆすりながら、身体に似合わない大きな声でわらうのであった。Y氏は嘗て、「××」という小説を書いたことがあった。その作者に逢うのは始めてであつたが、小説「××」の広告は、新宿や丸ノ内へのビルディングの多い空の上に、黄色いアドヴァールンが、ながい紐をひいて翻えつていたのでおぼえてゐる。

「題材はいくらでもころがつている。ああ題材なら山程あるさ」

そこへ満州人のボーイが入つてくると、Y氏は一田を促がして、室の外へ出ながら、

「きみの、ほら、××のない××を——××のある野原——にするんだネ」

と、笑い声と一緒に一田の肩をたたくのであった。

Y氏はまったく忙しい人であつた。自動車が、何とかいう大きなレストランの前につくと、卓にゆきつくまで、四五人の協和会服と、短い話を交わしている。それもい

ちいち違つていて、どれもが前からの繋がりがあり、そしておしまいにもならないような会話であつた。

中々立派なレストランであつた。そしてここも協和会服の日本人がいっぱいであつた。煙草の煙り、コップをカチあわせる音、なにか怖ろしく元気な肩を怒らしたような話声の交錯。一田は料理を食べながら、丸ノ内の地下食堂へんにでもいる錯覚がおこつた。黄一色の協和服と、怖ろしく向う意地のつよいような特別な空気をのぞけば、そつくり内地の景色であつた。

Y氏が他の客達と話してる間、一田はボンヤリながめていた。和服にお太鼓の帯を結んだ給仕女も美しかった。搬ばれる料理もビールも景気が良かった。どの人がどんな職分か、同じ服装なので見当もつかないが、どの協和会服も同じようにきつい語調で話をし、肩を聳びやかしているような元気があつた。

「どうだネ、満州の青年は活気があるだろう、え？」  
また自動車にのるとY氏が顧みみた。

「何といつても建国時代だからネ、意気で乗つくるんだ」  
Y氏は一田にも大きな葉巻を一本くれて、自分も火を点けた。

「これが康徳会館で、ほらむこうのあのビルが電電さ。あの建物は従業員だけで何千人いるよ」

一田は、はア、はアと、驚いてばかりいるのだった。

「丸ノ内へんと比べてどうだネ、え、負けやせんだろう」

間抜けな特派員はまるでお上りさんだった。Y氏は肩をゆすって笑った。

自動車は真ツすぐに走った。舗装道路はきまりわるいほどひろかった。のんきな馬車マアチヨが道の真ン中で踵をめぐらして、自動車をみるとあわてて鞭をふりまわしながら避けているのがあった。洋車ヤンチヨや、物売ウリや、道路掃除夫や、満州人がそこらにちらかっているだけで、大嵐のあとのようなあかるさと、とりとめなさが漂っていた。

「この道は、いったいどこまでつづいてるんですか」

一田はあんまり広すぎて西も東も見当つかず、きいてみた。このへんでは、雑草の茂った野ッ原が多くなり、ときどき化けものみたいな巨おおきなビルヂングが、ニュッときでいていたりしていた。もう秋である満州の空には、雲までがでかいとみえて、どこまで疾走はししても、うすい白雲が、新しい舗装道路とかさなりあって、野ッ原とおくに消えていた。

「さあ、知らんね」

Y氏はニヤニヤわらっていた。

「そこらで匪賊がでるかも知れんよ」

一田はおどろいた。

「ホンとですか？」

するとY氏は、大きな口をあけて笑うばかりで、臆病な特派員は、この人がからかったのかどうか、判断つかないのであった。

自動車が、大きな鉄門のまえに止まると、背のたかい満州人に敬礼されながら、Y氏はさきにたつて、ながい廊下をわたり、心やすく「処長室」と札のある室へ入っていた。

その広い室には、秘書らしい青年と若いタイプストらしい女がいるだけで、真ン中の大きな椅子におそろしく不精髭をはやした年輩の男が、開き襟のシャツ一枚でいた。

「ああよし、ウンよしよし」

傍へいって話しているY氏の肩越しに、入口で直立している一田の顔をみながら、何でもうなずいている。支那浪人ともいった風貌のこの処長は、何でも承諾しな

いものはないという風にみえた。

「どうぞ、よろしく願います」

一田は傍へいってお辞儀したが、Y氏のお蔭で、この方も挨拶が済んだわけであった。

それで吻としていると、とたんに、背後の入口から、大男の協和会服が入ってきた。そしてもっとおどろいたことには、今迄一ばんえらいと思っていた処長や、Y氏までがあわてて椅子から立ちあがったからである。

「あ、ウン、あ、あ」

その大男の老人は、一人でうなずき一人で返辞(へんじ)しながら、タイピストが抱えてきた椅子にどつかと腰かけた。

非常に忙しい激しい空気からやとと抜けだしてきたようであった。首から胸へ紫の紐をつるして白髪(はくはち)の五分刈頭をハンカチで撫でまわしている鈍間特派員は、或は大匠かも知れんと思つた。

紫紐の老人は、処長と二三言葉を交わしてから、こんどはY氏が何か話しかけると、

「なに？」

と云つて、きつとなつて振りむいた。

それは一田がビツクリした程、激しい調子であった。

何のことかわからぬが、とにかく当面の重大な問題らしかった。

「それを俺に云えというのかッ」

身体も大きい、声も大きかった。

「いえ、そういうわけじゃないんですが、つまり閣下の……」

たつていても相手の人より低いようなY氏は、しかしジャアナリストらしいあたりの柔らかさと、粘りづよさで、やはり何か訊いているのであつた。すると、

「俺は云わん、俺は云わんゾ」

こんどはもつと大きい、破れ鐘(わ)のような声が落ちてきた。血色のいい顔はもつと朱を濺(そそ)いだようになって、Y氏を睨めつけている。気の小さい特派員はこの室にいいのかどうか、モジモジしたほどだった。

処長はうつむいている。Y氏はやはり紫紐の人を、パチパチまたたきながらみつめているが、

「ああ俺は云わん、云わんさ」

と、こんどは独り言のようになって、椅子の肘をたたいている。それはまるで逸(は)りたつ自分を宥(なだ)めているみたいであつたが、一田には建國満州を推進している烈しい

力を感じるだけで、何のことかさっぱりわからなかった。

「なんだ、サクカ？」

Y氏が一田を紹介すると、紫紐の人はきき馴れぬ言葉をきいたように小首を傾<sup>か</sup>げてから、

「ああ、小説家か、ウン」

そして一田が畏まって差出した名刺を手のひらにのせて、

「一田福次、一田？」

とつぶやくのだった。Y氏が傍から一田について説明するのが、耳に入るのか入らないのか、しばらく黙っていたが、とつぜん、

「勇壮活発なものを書かんといかん」

と云った。

一田が姿勢を正していると、始めてこつちを一瞥してから云うのであった。

「小説ちゆうもんは、俺はきらいじゃが、もつと勇壮活発なものを書け、え？」

「は」

一田がお辞儀すると、また傍からY氏が、この特派員は、充分に勇壮活発な文章を書くだろうと、とりなして

くれるのであったが、紫紐の人は、もう一田の方は見ずに、やや疲れた調子で、ウン、ウンと云っているのだった。

三日めの夕方、すっかり準備がすんで、一田はハルピンの列車に乗りこんだ。案内役をしてくれる青年社員と一緒に、それから半ヶ月の旅をしたのであるが、それは満州のひろい野原を、わきめもふらず点在する日本人部落を追っかけてあるいたようなものであった。

移民部落の人々は、一田のような旅行者ないし視察者にもう馴れていて、いろんな説明も、見せる場所も、順序がきまっていた。それは却って印象を薄らげ、感興を弱めるようであった。

そうしてボンヤリな特派員は、風邪をひいて新京まで帰りついたのであるが、いまごろになって、おや、自分は満州国へきて、満州人はみなかったようだ、と気がつく始末であった。

### 三

しかし、引っこみ思案な一田の宿にも、稀<sup>ま</sup>れには来訪

者があつた。

土地の新聞記者とか、土地の官省に永らく勤めている人で、人知れず文学をやっている人とかであつた。そしてそんな人たちは、最後にはきまつて、何々公園は見ましたか？ 何々町の何々はのぞきましたか？ などと訊くのである。

一田が首をふるると、

「そりゃいかん、新京へきて、何々を見ておかんという法はない」

というのであつた。

たしかにそれは人々の好意であつた。間には案内してやつてもいいという人があつたが、一田はいつも尻ごみしてしまつた。ハルピンでも牡丹江でも、そんな土地の名物？ といつたものを二三見物してきたが、あまり心に馴染まなかつた。そこではロシア人も、満州人も、朝鮮人もみた。それは珍らしくもあれば奇抜でもあつたが、たのしくはなかつた。眼色、毛色が違い、言葉が通じないということ却つてはげしく泥をぶっかけあつたような気持だつたのを憶えている。

ところがある晩、強引な訪問客があつて、一田はひっ

ぱりだされたのである。

「いつかのお客さんが見えました」

女中がとりつくと、もうすぐその背後で、二人の男がたつていた。一人は痩せてシミだらけの紺色の背広を着て、人なつこく笑つており、いま一人は頭に縞帯をし、いかつい肩をそびやかして、たつていたが、痩せた方がいきなり、

「仕度はできましたか」

といいながらあがつてきた。

「仕度？」

一田はあわてて、座蒲団をすすめながら、いつ何の約束したかを考えるのだった。

「今夜は月もいいし、それに清明節がすぐだから、城内は賑わっていますよ」

痩せた方は、器用にそのシミだらけのズボンの膝に巻煙草をトントンとはじきながら、一人でたのしそである。

「城内？ ああ、城内」

城内という言葉で、一田は思ひだしたのである。城内とは、旧長春街のことで、新京に対していう言葉であつ

た。そういえば、四五日まえ、この人達がきたとき、城内見物につれて行ってやると云ったことがあった。

「あ、そうか」

一田が独り合点していると、

「あなたの希望の、その満州人の生活があるところを案内しますよ」

と、瘦せた方は、口軽にそそのめたのだ。

二人は「M満州」という雑誌の人で、このまえは一田の写真をとりにきた。そのときももらった「M満州」という雑誌は、ちよつと見当つかぬようなものであった。映画女優の口絵があるかと思えば、××軍大佐という軍人の講演みたいのがあり、Y町評判記といったような何々姐ねえさんの消息とならんで、かなり肩の凝る文学評論が載っている。相当贅沢なアート紙に何十人ものカフェーの姐さんの写真もあれば、諸会社や官省の祝何々の広告もたくさんあった。

「こんな部厚い雑誌を経営するのはたいへんでしょう」

遠まわしに訊くと、自分でFと名乗った瘦せた方は、

「それは、こつちが社長だからきいてください。私はホンの手伝いだから」

と、笑いながら云った。

しかし、O君というまだ若い男は、説明もしなければ、笑顔もせず、黙っていた。いかつい骨張った体格の、その社長は、どつか喧嘩の強い親分らしいところがあった。

それから、O君が持参してきたウオッカの瓶をあけたりして、だんだん話すうち、F君もO君も、もともと文学青年であることがわかった。F君は詩人で、舞踊教師で、×映のシナリオ書きで、××女学校の嘱託で、「M満州」の記者で、七つ位肩書を持ちながら、年じゅう一帳羅でいる男であった。O君もまた、「社長」などという立派な身装ではなかった。靴を脱ぐとき、靴下も一緒に脱いできて、裾のさけたズボンに、空から脛すねをムンズと組んでいる。あらつぽさというか、違ちがましさというか、そんなところに滲みでているこの人たちの生活の陰影が、一田にはそれが満州の一面ともなつて映るのであった。

しかし、それだけにこの人達の、いわゆる人の好よさも、露むきだしであった。酔うと、文学青年らしいセンチを伴つて、高声に内地の文壇を論じたりするのであった。

「満州人の生活は至るところにありますよ。お安い御用だ、御案内しましょう」



「そうですね、折角満州にきたんだから」

一田もウオツカで酔った勢いで、

「二度くらい、満州人のまともな生活にふれてみたいもんだ」

と、たしかそんな会話をしたのであったが、それをいま憶いだしたのであった。

「頭はどうしたんです？」

今夜は、すっかり繃帯しているので、O君の顔を見ていうと、

「いえ、何でもありません」

と、O君はそれっきりである。氣ぶりにださないうがだいぶ飲んでいるらしく、ときどき鼻を鳴らすように呼吸をついた。F君の顔を見ると、これも繃帯の原因を語らず、ニヤニヤしているのだった。

一田はたちあがって、服に着換えた。実をいうと、まだ進んでゆく気はなかった。というのは「満州人の生活があるところ」といっても、F君もO君も、どういう風にそれを解釈しているのだろうか？ 一田自身にもハッキリそれを説明できないが、どうやら相手の解釈が、こっちの氣持を十分に理解されているとは思えないからだ

った。

宿のおもてで、馬車を拾うと、二人しか腰かけられないので、O君は馭者台の下の踏板につつたちながら、何か満語で、怒鳴りつけるように叫んでいた。

「少し雲がありますね、これが満月だと素晴らしいですよ」

舗道のうえを、満馬がカタコトと走りだすと、F君はしきりと喋<sup>しゃ</sup>べる。

「空気の加減で、ホラ、月の色が内地と異<sup>ちが</sup>うでしょう。赤味がかつてますね。清明節などもそれと因<sup>よ</sup>んでるんですが、月は満州人の信仰の一つでして——」

夏服である一田は、馬車の上で肩をまるくしていた。乾いてるせいとか、雑草の茂った原<sup>はら</sup>っぱにも露気はなかった。

見覚えのあるY町など通りすぎると、急に四<sup>あ</sup>辺りがくらくなった。薄い月の光りで紫色にみえる支那家屋の屋根が、両側にしずんでいて、ひどく静かになったようであった。

「この広場からむこうが城内ですよ、いわゆる張作霖時代のチャンチュン街で……」

凹みになった広場を横切つて、馬車は凸凹の石だたみの坂をのぼつていったが、そこらは妙にうすぐらかつた。「ぼくらがきた当時、この両側はまだ土囊どのおうがつんでありましてネ、匪賊だか何だか、よく銃声をきいたもんですよ」

F君らがいつここへきたのか、それを訊くのも、風邪気のせい何か何となく億劫である。道幅はずつと狭くなつて、古びた石だたみの凹みに、水溜りが光つていた。どこをどう走つているのか見当もつかないが、両側の薄くらがりにならないでいる平べったい洋館や、紫色に光つている反りのふかい瓦屋根や、みんな古びたドツシリした感じがあつて、眼が馴れてくると、うす闇の軒下を腕を組み、背をまるくしてあるいている満州人の姿も、案外たくさんあつた。

ある街角で馬車が止まると、O君とF君は二人で何か打ち合わせながら、ボンヤリ降りてきた一田をひっぱつて、おそろしく狭い横丁に入つていった。

「ここが、その有名な……」

何とかF君が囁いたが、四辺りが突然あかるくなり、さわがしくなつたので、一田はきこえなかつた。ムツと

くる匂いと、意味のわからない甲だかい叫び声と、雑沓する人いきれがあつた。小さな屋台店やら、七厘を煽あおぎたてているのやら、こんな情景は、たしか佳木斯の旧波止場でもみてきたが、花街のこんな露店もめずらしいといえざめずらしかつた。

雑沓のなかには、ワイシャツの胸をはだけたロシヤ人もあれば、カーキ服のボタン一つおろそかにしてない満州国の軍人らしいのもあり、坊主頭に浴衣がけの日本人もある。そして、背がたかいくせに薄っぺらな、けばけばしい彩いろどりの門を入ると、急に円形の広場がひらけて、一せいに黄色い声が頭の上から落ちてくるのであつた。

「おあがんなさい、と云つてるんですよ」

F君は仰うのいて説明しながら、一田と一緒に、首をぐるりと廻転させてしまった。

それはまるで芝居の舞台面のようであつた。円い広場の形なりに、三階たか四階たかの、何百という室と窓が、一せいに下をみおろして、そこへは朱塗りの欄のついた梯子段がそれぞれに、広場の地めんから真つすぐにつづいていた。

一田は苦笑した。親切な二人は、やはり一田のいう――満州人の生活――を誤解しているのであった。

「これ、何々というんですよ」

そこへ梯子段を、緑色の裾をヒラヒラさせて、妓の一人が駆けおりてくると、馴染みらしい○君は、一田の方へは日本語で、

「あがつてみましょう。こいつ中々面白いんですよ」

と、まるで品物のように、妓の肩をたたいてみせた。

緑色の着物の妓は、一田の方へもちよつと首をかしげたが、瘦せた、笑わない妓であった。

三人は三階の、その妓の室へ入った。狭くてへんな臭いがした。うす汚れた桃色のカーテンがあつて、そこらじゅう南瓜の種子だらけの板の間に、テエブルが一つ。

そして室の半分を占めている木製の寝台があつて、隅っこに、洗面器だか何だか、得体の知れぬセトびきの白いものが、さむぎむと光っていた。

黒い服を着た男が、高粱酒だか、瓶にいられたものを持つてくると、○君は、グイと、それを呷あぶつてから、

「オイ」

と、その妓の肩をつかんでゆさぶった。

そして、片言の満州語で話しかけ、それが自分でわからずドモつてくると、手を打ちふつてみせながら、彼女に何か訊くのであった。それからこんどは忙がしく、一田の方をふりむいて、

「この妓は、××省××県の百姓の娘だったというんですよ、それが××何年の××事件のとき、一家諸共、離散してしまつて、えーと、それから」

また、こんどは妓の肩をつかみ、ニイ、とか何とか、まるで怒鳴りつけるような満州語で、そのさきを問い訊いているのであった。

「もういいよ、ありがとう」

肩をつかまれて、オドオドしている妓の瘦せた顔をみると、一田はますます困った。

たとえば、そんな風にして、彼女の口からどんな奇抜な、或は面白い物語がきかされたところで、どうしよう。

それは、聴く者の心を冷え凍こららせるだけで、微塵も温めはしないではないか。

#### 四

その何とかいう妓は、F君の説明によると、この何とか様ばかりでなく、この花街でも有数な妓だということであつたが、一田はこの妓はどうして笑わないのだろうと思つた。

「オイ、胡弓をきかしてくれよ、な」

こんどはF君が、O君よりはやさしく彼女に所望した。妓は、<sup>た</sup>起ちあがつてカアテンのむこうから、それを持ちだしてくると、椅子の上で立膝するようにして、弾き始めたが、一田はべつに感興もおこらなかつた。

痩せて面長の、妓の顔はととのつた眼鼻たちであつた。二十歳をいくつも出ていない年頃であつたが、笑わないからといって、いわゆる淋しい顔でもない。

硬い、何か芯のある、しかしそれも本人は無意識であつて、みたところはどこまでも無関心といった風に見える。ぶつたつて、叩いたつて、ほんとに心から彼女を笑わせたり、喋べらせたりすることは並大抵ではない。いや彼女自身が、もうそんなことを忘れてしまつてゐるといふ風にさえ見えた。

一田はボンヤリ、その顔を眺めてゐるうちに、<sup>スナガリ</sup>そうだ、と思つた。一田が半月の旅行のうち、<sup>スナガリ</sup>松花江の波止場波

止場でや、移民部落の畑の中でや、或は汽車の中や、停車場でみかけた行きずりの満州人の顔がうかびあがつてきた。

「出ようか」

何という曲だが、胡弓が終わつてから一田がいうと、妓はそれでどういふ表情もなしに、一田の方へも手をだして、

「マタ、イラツシヤイ」

と日本語で云つた。

冷たい、かたい掌であつた。

O君とF君とは、外へ出ると、また二人で相談してゐた。この二人の親切に対しても、一田は内心の失望を、顔色にだすわけにゆかないのであつた。

また馬車にのつたり、降りたりした。

こんどは人種の変つた、形式の違つた同じようなところを見物した。また、同じ花街でも、もつと陰気な場所も見物した。

しかし、一田の気分は風邪気も手伝つてゐるのか、益々寒くなつていった。

いったい、夜のこの街は、こんなところ以外には、あ

かるく電燈を点けているところはないのか知らん、と思つた。

「じゃ、も一ツ×××を見物しませんか」

二人も根気のいい人達だった。

「そんなの、いまだつてあるの？」

「いいから、まあ黙つていらッしやい」

×××ときいても、一田は大して興味は起らなかったが、また何度めかの馬車に乗つたのであった。

満州の月は、雲がうごかないのか大きいのか、同じようなぶい銀色で、灯影の少ない街を照らしていたが、  
○君は、酔いが発したらしく、馭者台の下の踏板につつたつて、大きな声で、何という歌だか、しきりと喚わめき散らしていた。

馬車はくらい街の路地角に止まったり、また走りだしては、○君に怒鳴られて止まったりするが、中々×××はめつからなかった。

「みんな追つ払われたんじゃないか」

と、F君がいい、

「いや、どっかへ移転しているんだ」

と、○君が云い張っている。

しかし、結局のところ、×××は、この裏街に明かい二人にもめつからないで、三人共くたびれてしまったのであった。

すると、こんどはF君と○君とが失望したような顔色になつて、一田が却つて慰めねばならなかった。

「どうもありがとう、もう結構です」

しぜん、一田がさきにたつてあるく形になつたが、Fイにある街角へきて、きゆうに展ひらけた灯影のあかるい通りが眼に入ると、あてもなくそつちて入つていった。

路地のような狭い湿しめつぽい通りであつたが、ここは花街のそれとはちがつて、擦れ違ちがう人にもおだやかな空気がある。庇ひさしをつつき合せて向いあつている古本屋や、赤い短冊のような招牌をつるした満州人宿があつたりする。板の上に小粒の梨を積みあげて、ときどき頓狂な声で叫んでいる男やら、カンテラの灯の下に清明節用の月餅をならべて、だんまりでしゃがんでいる青い綿服の女などもいたが、ごく市民的な盛り場らしかった。

「ここは劇場ですよ。いわゆる満州芝居ですが、入つてみますか？」

平べつたいコンクリ壁の、みたところ内地の公設市場

みたいな建物のまえで、一田が見当つかずに立止まっていると、F君がそばから教えてくれた。

「これが城内一の小舎ですよ、千人以上もはいるんです」  
それにしても何とうすぐらい小舎だろうと思っ

と、もうO君が、ズカズカと入口の柵をおしあけて入っていった。そして、黒い服を着た劇場の番人が二三人おどろいたようにとりまくのに眼もくれず、酔ってる勢いで、一田達の方を手招くのである。

「大丈夫ですよ、もつと中へお入んなさい」

うしろからF君が押すが、内部もくらくて蹴つまずきそうである。正面の舞台だけがあかるく、ムンとする人いきれであるが、だんだん馴れてくると、平場だけの小舎はまったくいっばいで、千人もの観客が呼吸も殺している静かさに、一田は闖入者のような自分達に気がつくのであった。

舞台には青い美しい着物の青年が、赤い椅子に腰かけて、何か歌っている。同じ舞台の端では十人ばかりの黒い服が、胡弓やら鐘やら、喇叭みたいなものを騒々しく合奏していて、何やらわからぬが、呼吸も殺してようような観客の真剣な空気が、それを護ってるようであった。

「あッ、坐っちゃいけません、南京虫がひどいんだから」  
すぐ傍に腰掛が一つ空いていて、藁で作った円形の敷物がみえたが、F君は一田の肩をつかんで、四辺かまわず説明するのだった。

「この演し物は、『××××』といって、古典的な恋愛物ですよ。いま、この一座の立女形××××が出てきますがネ、この演し物は一種民族的なもので、必ずあたるといわれている芝居ですよ」

F君は、演劇関係者だけあって、なかなかくわしいが、その高声にはこまった。うしろではO君が、酔いまかせのかまわなさで、狭い通路をふさいでたちはだかっているが、傍らの観客たちは、耳障りとみえて、さつきからふりかえっては、短い満語で、何か云っているのだった。

なるほど、まもなく舞台の真ん中に、黒い着物を着て、提灯をつけた美しい女が出てきた。すると、いままで正面にいた青い着物の青年は、椅子をかかえてうしろへさがった。その間に嘩し方も音色がかわり、舞台の真ん中を観客の子供のツそりと横切ったりするのであるが、不思議と進行している芝居の空気は乱れないのであった。

それは一種の歌劇であった。歌としぐさで劇は進んでいた。文句はわからないが、富裕な美しい青年を慕うて、貧しく美しい女は、はるばる提灯を点けて、逢いにきたのだということがわかった。女は提灯をかざし、舞台の前面にでてきて、その気持を唄うのである。観客は呼吸を凝らし、一節が終わるごとに、ホウツと熱い呼吸を吐いてるようであった。

一田もいつか、その南京虫を忘れて、藁の敷物に坐っていた。そして満州人ばかりの観客と肩をくっつけ、首をのばしていた。何か知らない温たかいものにつつまれてるようで、他の観客がもっている、食物からくる一種の臭気も苦にならなかつた。黒い着物の女は漸やくその青年を探しあてて近寄ろうとする。しかし青い着物の青年は、手にしている書物をたたくてみせて会わぬとこたえる。それは青年に大志があつて、いま女に逢つていられぬ、という意味らしいその素朴な、単純な劇の筋が、肩をくっつけている満州人観客の吾を忘れた表情や呼吸づかいを通して、一田にも温かい霧に包まれるような感情を与えるのであつた。

「いわば日本の所作事ですね、ごらんなさいほら、あの

しぐさ、手や足の動かし方が、ヒイ、フウ、ミイ、ね、ちゃんと合っているでしょう」傍からF君が、まだ説明すると、

「だまって、だまって」

と、一田は手をふつてみせた。

それが所作事だろうと、日本の歌舞伎だろうと、どうでもよかつた。一田は知らず識らず、満州人観客の呼吸と自分の呼吸を合せようとしていた。生れて始めて千里の旅をして、異民族のいる国へきて、一ヶ月の旅行のうちではじめて、満州人がたのしんでいる生活に、いまぶつつかつた気がしていた。

「もすこし、ね、これが終るまで」

欠伸しながら、もう出ようと云っているO君の方へ、一田は云つた。いま恋人に逢えない悲しい女は提灯と共に、身体を舞台に抛げだして泣き伏したところであつた。その立女形の芸が巧いか巧くないか、一田にわからないが、間抜けな特派員、旅に疲れた日本民族の一人である一田を、満州民族が自分達の芸術をたのしんでいるというこ

とで、慰めてくれるのであつた。

——女はそろそろと起きあがると、会えない悲しみ、

断ちきれない未練を唄った。ア、ア、ア、ア、ア、ア。非常に美しく切ない声である。一音は一音よりたかくなっていって、身装もしだらになった女は、舞台の前面へよろけでてくる。そしていままにプツンと切れるかと思うばかり、細いたかい声になって歌いあげるのだったが、いつか、一田も臉をあつくして満州人観客と一緒に手を拍たたいているのであった。

二〇一六年三月一五日 初稿 公開



【解題】

〈初出〉『公論』第三卷第九号（一九四〇年九月号）

※ 攔筆は（昭和十五年八月）。

〈単行本〉『結婚記（短篇集叢書）』（河出書房、一九四〇年十一月）

※ 本稿では『結婚記』を底本とし、各版を参照して校訂した。なお、各版で振られているルビ以外に、難読と思われる漢字には新しくルビを追加した。

入力・校訂者 Ⅱ 和田崇